

# 教育の力 時代を超えて今に生きるもの

## —戦前・戦中・戦後 女子学習院から学習院女子部へ—



左から、講師の西原氏・宮崎氏・西尾氏・倉本氏・武井氏・須山氏

司会◇明治10年、開校当初の学習院は、男子小学・女子小学・中学という編成で、主に男子の教育課程に重点が置かれていたため、明治17年宮内省管轄の官立学校となった際、別に華族女学校が設立されました。それが後に学習院と一体となり女子学習院へ、そして現在の学習院初等科や学習院女子中等科・女子高等科（通称女子部）へ編成されてゆきます。

今回の講座では、青山の女子学習院で現在の初等科にあたる時代を学ばれ、その後女子中等科・高等科へ進まれた方々を講師にお招きし、展示ではご紹介できなかった女子の初等教育をはじめ、激動の時代にも息づいた教育の力について、実際の御体験をもとに御講演いただきます。

西尾氏◇思苑会（昭和26年学習院女子高等科卒業生）では、5年程前に『昭和を生きて』という名の文集を作りました。その執筆と編集を通して、戦前・戦中・戦後の学習院で受けた教育が、ただ教養とか知識だけでなくもっと根本的なもの、どんな時でもどんな場面にも正面から向き合える精神の力といったものを与えていただいた事に改めて気づきました。

特に戦中、私達のクラスは、学童疎開組と、個人疎開組と、親の仕事の関係で東京にいたいわゆる残留組と、バラバラに暮らしまとまった経験をしていません。そこで、今日の講座ではそれぞれの体験者がその実態についてお話しすることに致します。

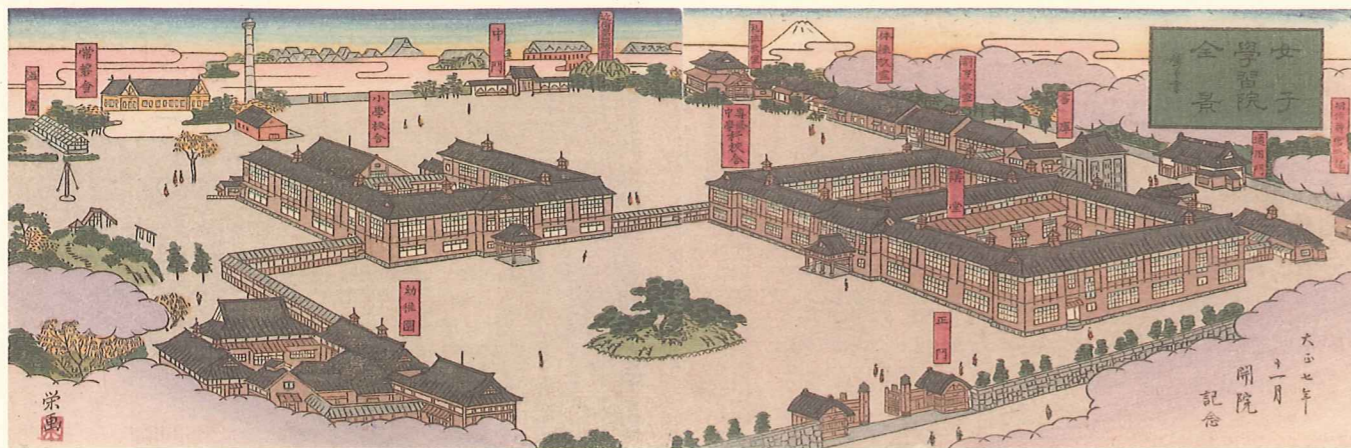
### 1. 青山校舎の頃

武井氏◇私達が6歳、一年生になった昭和14年、その頃、女子学習院は宮内省管轄で、一種のエリート養成のための学校で

た。すなわち、皇族・華族を中心とした身分社会の、国における将来の指導者層となる人々の配偶者にふさわしい、立派な女子を教育するという使命を持っていました。青山の女子学習院は、広々とした敷地にどっしりとした木造の校舎が幾棟もありました。よく整備された校庭には様々な樹木や植物が緑豊かに植えられ、体操場、運動場が各2箇所、中等科の校舎には、ピアノの練習室がいく部屋も並んでおり、南通用門の側には弓道場もありました。

入学時1クラス24名の小人数編成、南組北組の2クラスで1学年でした。式の後、主管（担任）の先生から銘々に『教学聖訓』という立派な金糸織の畳紙に包んだ本を渡されました。これは、いわば勅語集で、皇后陛下から賜った御歌などが網羅してありました。さらに、もう一枚配られた厚手の紙には「オヤクソク」とありました。「○何事モシンノウツヨクイタシマス ○不便モ不足モガマンヲシマス ○何デモ大事ニ使ヒマス ○シツカリ勉強イタシマス ○カラダヲ丈夫ニキタヘマス ○出征シテキル方々ニカンシヤシマス ○人ノタメニ喜ンデ働キマス」この7箇条は毎日声に出して読み上げて暗唱できるようになりました。また、最敬礼のお稽古もありました。神宮競技場で行われた春の体操会には、海軍軍楽隊の生演奏が高々と響きました。授業は学科ごとに専門の先生が担当なさる仕組みで、特に国語の授業は重視されていたと思います。宮崎氏◇立派な女子を教育するという展望のもと、どのような場面でも動じないよう、学校では上級になるほどいろいろな行事がありました。大勢の前で正しい姿勢ではっきりとよい日本語で話す訓練「修辞会」や、外国の高位の人々と堂々と交わるための外国語を話す訓練「欧語会」などが度々催されました。

言葉といえば、戦前の女子学習院には今では考えられないような敬語の使い方がありました。現在の敬語では、身内のことを外に対していうとき「私の父が申しおりました」とか、社長に関しても「午後には戻っております」などと謙譲語を使いますが、先生からは「皆さんのお父様、お母様はご身分の高い方々ですから、敬語を使わなければなりません」と教わりました。つまり家庭内のメンバーでない外の相手にも「お母様が仰いました」「お父様に申し上げました」と表現しなければならないのです。しかし、このような古風な教育は戦後になって消えていきました。



〔青山校舎の様子〕

絵葉書「女子学習院 全景」(復刻版) 大正7年11月開院記念 学習院大学史料館所蔵



1. 青山校舎航空写真 (S10年) 2. 女子学習院入学時にいただいた『教学聖訓』 (S14年) 3. 塩原疎開中、自由時間に皆で考えた食べたいおやつ 4. 明賀屋玄関での初等科卒業記念写真 (S20年) 5. 工藤祐基先生 6. 現在も女子部校舎として使用されている近衛騎兵連隊の建物

昭和16年12月、日本は戦争に突入します。しばらく学校生活は平穏に過ぎましたが、先生が出征なさるなど身近に戦争が忍びより、いよいよ戦況が厳しくなった昭和19年8月23日、私達は栃木県塩原へ集団疎開をしました。初等科4年から中等科2年までの212名と先生が、塩原の明賀屋旅館に引越しました。

### 2. 塩原 疎开学園の生活

武井氏◇明賀屋旅館は、とても美しい自然に囲まれていました。旅館を借り切り、各教科の先生方も一緒に、いわば学校そのものの移転です。本館は木造4階建てで居住部分に充てられ、上級生を室長として、下級生を組み合わせで部屋割りを決めました。渡り廊下で本館とつながっている新館の百五十畳の大広間を仕切って5つの教室が作られ、学年毎の授業は毎日朝8時半から行われます。大広間の舞台を使って合唱や劇などを取り混ぜた談話会や万葉集の和歌などを鑑賞しつつ月見の会も行われました。食糧事情は厳しく、地元の野菜などを使って工夫したものが多かったが、大抵一汁一菜でしたからとてもお腹がすきました。お手玉の中の小豆、お裁縫の鑲でバリバリにのびたみかんの皮、コップの中でソースをかけて佃煮にしたお茶殻など、自由時間にあれこれ工夫して拵えて食べました。困ったことは、ノミ・シラミに悩まされたこと。栄養状態が悪いせいか、さされたあとが化膿する生徒もいました。食事にいされる大根の葉やお芋をいれたおかゆがだんだん水っぽくなるので、食料が乏しくなるとゆくの感じていましたが、このような中でも、授業は毎日着実に進められました。先生方の御苦労は、並大抵ではなかったと思います。

倉本氏◇昭和20年4月、塩原疎开学園の生徒となるべく、中等科新入生と初等科新4年生は上野駅に集合しました。私もその中の1人でした。空襲が激化している東京に残る親は、幼い子供を付き添いの先生の手託して、必死で無事を祈っていました。ようやく行き着いた明賀屋で、新入生18名の入学式が行われ、続いて主管の先生に案内されて中一の教室に行きました。屈託のない沢山の笑顔が緊張気味の私達を暖かく迎え入れてくれました。授業の中でも中等科で新しく加わった西洋史と英語が新鮮で魅力的でした。戦時中、多くの学校で敵国語として排斥されていた英語の授業も、学習院では通常通り行われていました。広い教室が静まるのは、食事の時間と、屋内勤務奉仕の時間です。端布から織り糸を再生する機結びの作業を、私達は黙々と続けました。自習時間と自由時間には教室が一段と活気に溢れました。

5月、東京山の手大空襲により、女子学習院の校舎全焼の報せがありました。8月、玉音放送を聞き、日本の敗戦を知りました。秋になると帰京する人、家族の疎開先へ行く人など、生徒がひっそりと去っていくようになり、11月、塩原疎开学園は閉園します。武井氏◇空襲で家が焼けて帰京できない生徒14名と数名の先生方が、西那須野の三島通陽家別邸の離れに移りました。延長疎开学園という形で、引き続き授業と生活が営まれました。翌年3月にこの学園が終了した時の生徒数は8名でした。女子学習院の先輩である三島氏とご家族には、大変にお世話になりました。

### 3. 青山校舎の焼失

西尾氏◇昭和19年夏、クラスの半分以上が学童疎開で塩原に

行ってしまった後、残留組と呼ばれる少数の生徒は、そのまま青山校舎に通って、半日勉強、半日ガーゼ畳みの勤務奉仕をしました。昭和20年4月に中等科に進学した頃には、夜も昼もしばしば空襲がありました。3月10日の下町大空襲に次いで、5月23日・25日にも東京大空襲があり、青山・渋谷・麻布が焦土と化しました。私も母とともに煙と火を避け青山墓地に逃げました。空襲警報が解除になって自宅に帰る前に、青山校舎の様子が気がかりで見に行ったところ、すでに建物の礎石とくすぶる残骸を見るだけでした。燃え続ける町を通過して辿り着いた我が家は、瓦礫の山となっていました。箱根へ向かうため表参道を通り抜けて歩いた時、焼けた死体や防火用水の中に浮いている死体を見ました。南新宿で小田急線の車内に座った時の記憶はほとんどなく、ただ火傷を負っていないことを確かめて、座らせてもらっていました。背中リュックには、『教学聖訓』と焼おにぎりをに入れてもらっていました。東京に残った友人達は、多かれ少なかれこのような惨状を見、口は閉じていても生忘れぬこととして頭に残しているはずでした。

### 4. 東京 仮校舎での授業

西尾氏◇青山の校舎を失ってから、目白の徳川義親邸の一部をお借りした授業と勤務奉仕が始まりましたが、しばしばB29の爆撃を受けました。通学途上で機銃掃射を受けることも珍しくありませんでした。遠路、徳川邸に着くと、先生と、ああ無事でよかった！と手を取り合うのが挨拶でした。

やがて終戦を迎え長期休暇に入った学校は、文京区音羽の護国寺境内の幼稚園を仮の校舎として10月10日再開します。塩原から、あるいは個人疎開先から復学して来る旧友との再会で毎日が感動でした。この教室で、初めて私達のクラスは中等科一年として揃ったのです。

### 5. 戸山ヶ原に新校舎の地を求めて

西尾氏◇昭和21年3月のある日、先生から荷物と椅子をもって外に並ぶよう突然いわれました。2列になって行進です。着いた先が、今の女子部、当時の近衛騎兵連隊兵舎でした。このときのことを、私達を高等科の3年間主管として導かれた工藤祐基先生が書かれた記録が、「輔仁会雑誌」第189号に載っています。

武井氏◇(注：講座当日は、工藤先生の記録を抜粋して武井氏が朗読されましたが、ここではその一部を要約してご紹介します) 工藤先生の記録によれば、新しい学習院の校舎は、青山の焼け跡に再建するのが最も望ましいことでしたが、終戦後11月に皇室全財産の凍結が発令され、短期間の再建は不可能と思われました。既存の建物を手に入れることが唯一の方法で、不用



武井 純子氏 宮崎 茂子氏